

## 一 兩齋妙佐の出自

重田 みち

一 兩齋妙佐は戦国時代細川（長岡）家に属し、同家の能の催しにしばしば出演して大きな役割を果たした能楽史上の著名な人物である。妙佐について能楽研究

の方面からは、主に表章・中村格・松岡心平各氏による考察が行われている。それらによれば、彼は細川家の同族である飯河氏の治部少輔秋共と同一人物で、後に細川幽斎から長岡姓を受けた。妙庵玄又（細川幸隆）の能の師匠格であり、その妙庵が愛宕下坊に入院する以前に同坊に入院して後で還俗した。能は観世宗節・古津宗印・大和宗怒・歳阿弥の指導を受け、また連歌の方面でも活躍した。前掲各氏のこのような御指摘によって、妙佐についてはかなりのことが知られるに至ったと言えよう。

ところが、筆者は右の三氏の御指摘とは別資料の中で、偶然この妙佐の名前に出くわした。実は妙佐は明経博士清原宣賢の実子なのである。それを語る資料は、

内閣文庫蔵「諸家系図纂」巻二十一冒頭の「清家系図」（「続群書類従」系図部所収）である。すなわち同書には宣賢の第七子として、

妙佐 飯川氏 細川幽斎之師也。

という記述がある。「飯川氏」とあるのが、先述中村氏の指摘された、妙佐を飯河氏とする記事（「綿考輯録」）に一致し、「細川幽斎之師」が幽斎との関係を思わしめるところから、この「妙佐」は先述した一兩齋妙佐その人に違いない。「清家系図」は慶長十九年に没した秀賢の代までを記し、天正十六年の記事を下限とするから、少なくとも妙佐の時代に關する記事の信頼度は高いと言えよう。また宣賢の子妙佐の名は同じく「諸家系図纂」同巻所収「清原系図」にも見え、「飯川」と注されている。

清家と能との関係といえ、近年落合博志氏によつて良賢が世阿弥伝書「五位」に跋文を施した事実が指摘されたが、宣

賢はその良賢から数えて六代目に当たる。環翠軒と号し、法名宗尤。主水正・大炊頭・藏人・直講・少納言・侍従の諸官を歴任し、正三位に叙せられ、天文十九年、七十六歳にて卒す。広く経学を講じ、経書及びその注釈の筆録に尽力した人物であり、漢学研究において最も注目される学者の一人であると同時に、神道説や和書などにも通じた博学の努力家として知られる。まさに妙佐はこの宣賢の実子であり、飯河氏に養子として迎えられたのである。

また、このことから必然的に知られる妙佐の実兄姉の履歴は、能楽史上興味深い事柄を含んでいる。そのことについて、以下別分野ではすでに知られている事柄であることを断りつつ述べておく。末尾に妙佐周辺の系図を私にまとめたので、適宜参照されたい。

まず注目されるその一は、宣賢の女子すなわち妙佐の姉が、幽斎の母に当たることである。先述した「清家系図」には宣賢の第二子として、

女子 三淵伊賀入道室 玄旨法印母

と記している。右の玄旨法印は幽斎の別称であり、つまり妙佐は幽斎の実の叔父に当たる。したがって、幽斎の子である細川忠興や、その弟の妙庵玄又にとつては、妙佐は実の大叔父に当たるのである。こ

